

第 36 回豊橋市小中高特連携教育推進協議会議事要録

令和 7 年 2 月 3 日 開 催

豊 橋 市 教 育 委 員 会

<b>第 36 回 豊橋市小中高特連携教育推進協議会</b>	
<b>日時</b>	令和 7 年 2 月 3 日 (月) 午前 9 時 30 分～午前 11 時 30 分
<b>場所</b>	豊橋市役所 東 86 会議室
<b>出席者 敬称略</b>	<p>教育長 山西正泰</p> <p>教育委員 西島豊 内浦有美 中島美奈子</p> <p>高等学校等校長 寺田安孝 (時習館)、鈴木敏夫 (豊橋東)、山畑真樹 (豊丘)、 有賀洋之 (豊橋南)、牧野仁志 (豊橋西)、高木永幸 (豊橋工科)、 間瀬泰宏 (豊橋商業)、佐羽尾稔幸 (豊橋高)、衛藤真有 (豊橋聾)、 彦坂充俊 (豊橋特別支援)、山田淳子 (くすのき特別支援)、 満田康一 (桜丘中)、横山貴美 (桜丘高)、高倉嘉男 (豊橋中央高校)</p> <p>小中校長会 久野哲司 (南稜中)、梅原康史 (東部中)、鈴木孝昌 (豊岡中) 吉倉真紀 (豊小)</p> <p>※欠席者 渡辺嘉郎 (教育委員)、山崎宏人 (藤ノ花女子)、 中村三木也 (羽根井小)、石川和志 (教育部長)</p>
<b>オブザー バー</b>	<p>安藤雅也 (東三河教育事務所 主査) 小柳津清千 (東三河教育事務所 主査)</p> <p>彦坂繁 (蒲郡市教育委員会 主幹)</p> <p>大羽佳洋 (田原市教育委員会 指導主事)</p>
<b>事務局</b>	鈴木大介 (教育政策課長) 加藤友治 (教育会館長) 他 5 名
<b>内容</b>	<p>1 協議事項 各分科会の今年度の活動状況と次年度の活動について</p> <p>2 報告事項 東三河小中高特連携教育推進協議会について</p> <p>3 連絡事項 第 37 回豊橋市小中高特連携教育推進協議会について</p>

## 議事録

### 開会

■内浦会長 開会を宣言し、欠席委員、オブザーバーを紹介

### 1 協議事項

各分科会の今年度の活動状況と次年度の活動について

#### (1) 英語教育分科会

■鈴木委員長 活動について資料説明

#### (2) 理科学教育分科会

■寺田委員長 活動について資料説明

#### (3) 特別支援教育分科会

■山田委員長 活動について資料説明

#### (中島委員)

特別な支援を行ううえで、すすくシートや個別の支援計画などさまざまな様式が幼・保・小・中・高・大にあります。それぞれの様式を丁寧に読み解いて記録を作成するだけでなく、どのように活用していくかが問われていくと考えます。記録を作成する中で、どのような支援がその子にとって有効であったのかを残していくことが大切です。支援計画は、保護者と一緒に作っていきます。家庭でどういうことに困っているか、それによって子どもがどこにつまずいているかということが子どもの理解や子どもを捉える力を育むことに通じていきます。支援の仕方について、家庭と園と療育の担当者が集まって定期的に話し合いを開いています。情報を共有しながら支援をしていくことで、子どもたちをそのままの姿で受け止め、保育から教育につなげていけると 생각합니다。そのほかにも医療機関との連携や、保育課やこども保健課との連携も必要です。外国籍の子どもの課題もあり、多様な子どもたちを、どのようなステージや環境の中で話し合っていくのが大切になります。支援計画が、真に活用される第一歩になっていくということを願っています。

#### (山田委員長)

保護者の方にご理解いただきながら、保護者と一緒に作っていく、「支援計画」や「すすくシート」はそうだと思います。ご家庭で、わが子の障害や、配慮の必要性を自認するところから始まり、「一緒によりよい子育てをしていきましょう」というスタンスで、すすくシートを作られると思います。教育支援計画も同様ですが、中学校で作成したものを、高校に申し送るかどうか、一つ大きな壁としてあります。生徒さんご本人の意思や、保護者の意思で、「高校には持って行きたくない」、「見せたくない」、「差別されたり、区別されたりするかもしれない」、というようなことが、まだまだ多いように聞いています。意識

の改革がすすみ、高等学校の中でも特別支援が当たり前になるとよいと思っています。

(高倉委員)

コロナ前にフィンランドなど北欧の学校を視察した時に、今までの成長の記録、例えば幼稚園の時に作った絵など、全ての情報がデータ化され、管理されていました。

壮大な計画になりますが、現在、紙で行っているものを、データ化して全部見られるようにすると、とても便利だと思います。外国の例もありますので、マイナンバーを活用していくという方法も考えられますので、将来的に、データ化されるとよいと考えます。また、「高校に支援計画を見せたくない」、「引き継ぎされたくない」という家庭や個人がいることも理解できます。しかし、幼稚園、保育園とかこども園から小中高までの連携をとるためには、どういう風に教育を受けてきたのかという情報について、同意を取って共有することはよいと思います。

(山畑委員)

支援計画について、小中学校で作成されている数からすると、高校に引き継がれている数は大変少ないです。ただ、高校としては支援計画の引き継ぎはとてもありがたいと感じています。それを適切に活用し、スクールカウンセラーと連携して、感情が抑えられないなど、子どもの困り感に対応することができています。

(4) 言語能力分科会

■吉倉委員長 活動について資料説明

(内浦会長)

言語活動ブックは、若い先生方を中心に開発されたということですが、データで共有がされるのですか。

(吉倉委員長)

データでの共有ではなく、各学校に数冊配付していく予定です。とても役に立つと考えていますので、いろいろな世代の方に読んでいただけたらと思っています。

(彦坂委員)

目次の中に特別支援教育のページがありますが、どのような内容になっていますか。

(吉倉委員長)

話す、聞くの特別支援教育の視点と言語活動で2ページ分あります。子どものもつ困難さと、それに対してのねらいや手だてや支援が表で掲載してあります。例えば、声に出して発表することや、人前で話すことに不安を感じているという困難さであれば、ねらいは「自信をもって伝えることができる」、「多様な表現方法を選べる」となっています。冊子には「発表内容を書いた紙を見ながら話す」や、「話す順番を示したカードを見せる」、「コミュニケーショントレーニングで継続的に取り組む」、「言語以外の方法で伝えるためのICTの活用」など、いくつかの項目で、困難さに対して例示がしてあります。また、授業場

面を想定して、例えば「ロールプレイをここに入れる」とか、「録画をし、声が再生できるようする」などとなっています。同様に、書く、読むについても掲載がしてあります。

(彦坂委員)

LDなど、学習面で困難さがある子どもたちにとって、どこに困難さがあるのかをとらえ、支援が行われるということは、とても有意義だと考えます。

(内浦会長)

限られた予算でということですが、幼保の現場や高校でも活用することで、小中学校でどんなことを身につけるのかということをも共有できると思いますが、どのように共有されますか。

(吉倉委員長)

高校にも配付をしていく予定です。

## 2 報告事項

東三河小中高特連携教育推進協議会の活動について

■小柳津主査、安藤主査 活動について資料説明

(間瀬委員)

本校で異校種交流事業を行いました。とても有意義な時間でした。小学校、中学校の先生から今までにない視点で話し合いが行われ、さまざまなアドバイスがありました。参加した教員が中心となって授業の改革を行っています。本年度、授業力を上げようと取り組んできましたが、この異校種交流会が起爆剤となって、授業力向上に向けて職員の意欲が高まりました。生徒へのアンケートでは、「授業がよりよくなった」との回答が多く寄せられ、異校種交流事業をきっかけに学校が変わったということを目の当たりにしました。複数回行っていくことで、発達段階に応じた授業で求める能力が明らかになっていくと感じます。本校の職員に参加するように呼びかけていきたいと考えています。

また、小学校道徳研究部の研究授業に参加させていただきました。道徳の授業の中で、異校種であっても、根っこの部分のところで、活用できる部分があり、本校でも取り入れていこうとしているところです。

(山西教育長)

多くの声を聞かせていただき嬉しかったことは、高校の先生方が、小中高特の連携に非常に前向きに取り組んでいただいていることです。平成19年に協議会をつくったときには、高校の先生から批判的な意見があり、前教育長が「子どもの成長を設置者の違いで分断してはいけない」ということを述べられました。今日に至るまでに、小中高の連携に特別支援が加わり、私立校も加わってきました。豊橋の子どもは豊橋で育てる、東三河の子どもは東三河で育てるというスタンスが根付いてきているということを楽しんでいます。この形を継続していく必要があると考えていますので、ぜひ、小中学校の研究発表に参加をお願いします。小学校、中学校で力を入れている問題解決的な学習、探究型の学習はどのよ

うに進められているかということを見ていただきたいです。さらに、桜丘中学校、桜丘高等学校、豊橋中央高等学校においても授業公開をしていただければと考えています。私立ではどのような学びをしているのかということを理解できると連携が一步すすむと思います。

さらに、学校現場では、顕微鏡を自由に使えたり、ピアノが自由に弾けたりする環境を整えることで、理科好きや音楽好きな子どもを育むことができると考えるので、取り組みを始めていただきたいと思います。

(内浦会長)

私立の授業公開について、ご意見がありました、いかがですか。

(高倉委員)

個別の依頼で引き受けることがあります。個別なら対応ができます。

(満田委員)

学校ごとの依頼で引き受けています。小学校の先生の受け入れの視点はなかったので、できる方向で検討していきます。

(高倉委員)

「ほの国」未来セッションについて、HPにログイン画面に「東三河の公立高校について探求してみよう」と書かれています。私立高等学校へのリンクを貼っていただいていますので、「東三河の高校について調べてみよう」と変更していただければと思います。

(小柳津主査)

中学校から、私立高校についても調べたいという問い合わせがあります。リンクが張ってあることを案内しておりますが、名称につきましては検討していきます。

(内浦委員長)

全体を通して、ご意見、ご質問をお願いします。

(中島委員)

幼保も小学校との連携を行っています。近隣の小学校の先生に幼稚園で出前講座を行っていただきました。子どもたちは、とても不思議がっており、主体的、対話的な学びは0歳児から始まっていると考えております。出前講座では、保育士も興味津々でした。ぜひ保育課を使って、幼保との連携も進めていただきたいです。

(西島委員)

小中高特の接続の中で、ICTの活用を考えていただきたいです。小学校の授業で、中学校の先生の感想にあるように、小学生で育まれた基礎的な力を中学校でどのように発展させていくのかということが課題としてあります。ICTについては、活用方法の側面とインフラ整備という二つの側面があると考えます。小中高の関係性の中でより豊かにIC

Tを活用できる環境整備というものができているかということについて、客観的に聞きたいです。単発でなく、スパイラル的に行っていくためには、どのような環境が必要なのかご意見をいただければと思います。もう一つ、理科の機会が少なくなっているということとICTは関係があるのかご意見をお聞かせください。

(寺田委員)

人口が減り学校が縮小する中で、例えば中山間地域とか半島地域など、小中学校の維持存続が厳しいという状況があります。そのまま放置すると学校がなくなり、地域が消滅する可能性もあります。そこを補填するための仕組みとしてのICTは、今後有効になると考えます。

今後、学校そのものの定義付けについて、原点に立ち返って考えたときに建物や教員の配置について考えていかないといけないと思っています。そういう中で、私たちの小中高特連携教育推進協議会が、発展的に教育インフラをつくっていくというところまで話題ができると、有意義になると考えます。

(西島委員)

ICTとリアルの時間を取っていくことが大切だと考えます。効率と非効率を分担して構成していくのがよいと考えています。ICTの使い方と合理化という部分において、まだ考えることができると思います。そうすることによって、教育が地域の全体の競争力につながればと思います。

(山西教育長)

小中学校で使っているアプリについて、子どもの戸惑い等あればお聞かせください。

(加藤館長)

授業支援ソフトについて、県立高等学校と小中学校で使用しているものが違う現状があります。

(寺田委員)

先日の県の報道でもありましたが、タブレットは、自前で準備することになります。豊橋だけでなく、他市町との接続もありますので、今後の課題として取り上げていただきたいと思います。

(高倉委員)

アプリについては、子どもは対応ができると思うので、気にするところではないと考えます。

(寺田委員)

令和8年から、附属中学校が設置されます。設置者の違いを乗り越えるチャンスだと考えます。研修などを計画していただくことをご検討いただければと思います。

(高木委員)

夜間中学校については、県は外国籍の方が対象になることを想定しております。希望者の多くは、外国籍の方でした。そこで、進学と日本語の習得と目的を分け、コース選択ができるように考えています。

### 3 連絡事項

第37回豊橋市小中高特連携教育推進協議会について

■鈴木教育政策課長 令和7年5月27日(火)で調整している旨を連絡

閉会

■内浦会長 閉会を宣言し、終了